

聖書：ヨハネの黙示録 22：1～5

説教題：御顔を仰ぎ見る

日時：2021年11月14日（朝拝）

ヨハネの黙示録の最終章となりました。ヨハネは御使いから「子羊の妻である花嫁を見せましょう」と言われて高い山に連れて行かれ、聖なる都エルサレムが天から降って来るのを見ました。その都の様子を遠くから眺めることに始まって段々近くに寄って行くという視点でこれまで記されて来ましたが、今回はその最後の部分、まとめの部分となります。今日の箇所を読んで思うことは何でしょうか。それは創世記のあのエデンの園を思い起こさせる世界がここにあるということではないでしょうか。創世記の1章と2章には神と人との交わりがあり、神の豊かな祝福に満ちている世界がありました。しかしあの楽園は罪によって失われました。アダムとエバはその園から追い出されました。もう二度とあの祝福の状態に戻ることはできないのか。しかし聖書の一番最後のこの章に、あのエデンの園を彷彿とさせる情景が描かれています。しかもそれは最初の時よりもさらに勝る状態のようです。神はそのような祝福の世界をご自身の民に用意くださっていることがここに言われているようです。

さっそく内容を見て行きますが、まず記されているのはこの聖なる都にはいのちの水の川が流れていることです。エデンの園にも川が流れていました。創世記2章10節：「一つの川がエデンから湧き出て、園を潤していた。それは園から分かれて、四つの源流となっていた。」 それに対して今日の箇所にある川は「いのちの水の川」と表現されています。いのちの水とはいのちをもたらす水という意味でしょう。またいのちとは永遠のいのちという意味でしょう。ヨハネの福音書4章14節：「わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます。」 同福音書7章37～38節：「だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります。」 この人を真に生かすいのちの水が川のように豊かに流れている光景がここに描かれています。またその川は「水晶のように輝く」とも言われています。杉並区にある善福寺川も、私の実家の近くにある北上川も、眺めていて心が癒されることがありますが、透明ではありませんし、時折臭い匂いも放ちます。それらとは全く比較になりません。きらきら輝くその水は聖さを、またこれを飲む人に対して聖める力

があることを示しているのでしょうか。そしてその川は「神と子羊の御座から出て」とあります。この箇所のもとになっているのはエゼキエル書 47 章ですが、47 章 1 節に水は神殿の敷居の下から流れ出ていたと記されています。前回の 21 章 22 節で「神と子羊が都の神殿」と言われていたことを考えるとエゼキエル書と一致します。これはいのちの水の川は神とキリストから流れ出ていることを意味します。あるいは神はキリストを通していのちの水の川の祝福を人々に与えてくださるという意味でしょう。ヨハネの福音書 17 章 3 節：「永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです」 永遠のいのちは神とキリストから流れ出るものであり、神とキリストとの交わりを通して人に与えられ、人を満たすものであるということでしょう。

2 節に、そのいのちの水の川は「都の大通りの中央を流れていた」とあります。これはこれこそ御国の祝福の中心にあることだということでしょう。そしてここでさらにエデンの園を思わせる記述が出て来ます。それはいのちの木です！創世記 2 章 9 節に「神である主は、その土地に、見るからに好ましく、食べるのに良いすべての木を、そして、園の中央にいのちの木を・・・生えさせた」とあります。しかし人間が罪を犯したことにより、この木に近づくことはできなくなり、創世記 3 章最後の 24 節に「こうして神は人を追放し、いのちの木への道を守るために、ケルビムと、輪を描いて回る炎の剣をエデンの園の東に置かれた」とありました。それ以来、このいのちの木はどこにあるか誰も見たことはありません。エデンの園はどこへ行ったのか誰も知りません。ところがヨハネの黙示録の最終章に、そのいのちの木が現れています！これはエゼキエル書 47 章 12 節の次のみことばを下敷きにしています。「川のほとりには、こちら側にもあちら側にも、あらゆる果樹が生長し、その葉も枯れず、実も絶えることがなく、毎月、新しい実をつける。その水が聖所から流れ出ているからである。その実は食物となり、その葉は薬となる。」 この預言通り、いのちの木はいのちの水の川のこちら側にも、あちら側にもあります。ですからエデンの園以上にたくさんあります。またそのいのちの木が 12 の実をならせるもので、毎月一つの実を結んだというのは、エゼキエル書が語るように絶えず年中、実を実らすということでしょう。また 12 という数字は、黙示録に何度も出て来た通り、神の民と関係する数字ですから、それは神の民を十分に満たすものであるということでしょうか。

また「その木の葉は諸国の民を癒やした」ともあります。実だけではなく、その葉

にも力があるようです。ここに「癒やす」という言葉があるのは、やがての天国でも病や痛みがあることを意味するのだろうかと問う人もいますが、そういうことではないと思います。新天新地には一切の痛みや悩みはないと言われていました。参考になるのは 21 章 4 節で「神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる」とあったことです。これは天の御国でも悲しみの涙を流すことがあるという意味ではなく、地上で様々な痛みや苦しみを通って来た聖徒たちの目の涙を神が一度限り、最終的に拭き取ってくださるということでした。それと同じように、地上で様々な中を潜り抜けて天の御国に到達した者たちは、その段階では様々な痛みや古傷のようなものを持ったままかもしれません。しかしいのちの木は、そのような諸国の民を癒やしてくれるのです。先ほどのエゼキエル書では「その葉は薬となる」と言われていました。この木の葉を通して、諸国の民「すなわちあらゆる国から救われた異邦人クリスチャンも、地上で負った様々な痛みや古傷をみな癒やされ、心身ともに健康な状態、すがすがしい状態、力と喜びが湧き起こって来る状態へと導かれるのです。

3 節に「もはや、のろわれるものは何もない」とあります。人間が罪を犯した後、創世記 3 章 17 節で神はアダムに「あなたが妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、大地は、あなたのゆえにのろわれる」と言われました。この罪の呪いが私たちと私たちの生活すべての上に痛みと悲しみをもたらしていました。しかし今やキリストの十字架による贖いが最終状態に至ったがゆえに、呪われるもの、神の怒りが向けられるものは何一つなくなりました。あとはただ神の祝福のみが満ち溢れる世界となりました。それゆえに、そこに住む者たちは恐れることなく神と子羊の御座に直接近づき、仕えることができます。3 節の「仕える」という言葉は「礼拝する」という意味の言葉です。ですからいわゆる天国の生活とは何もやることなく、暇でソファーにただ寝そべっているというような生活ではないのです。それは神を心から礼拝し、神にお仕えし、そこに喜びを見出す生活です。

そして 4 節に「御顔を仰ぎ見る」とあります。神の御顔を仰ぎ見ることは旧約以来、神の民があこがれ、待ち望んだ祝福でした。モーセはそのことを願いましたが、主は出エジプト記 33 章 20 節でこう言われました。「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである。」モーセに許されたのは、主が通り過ぎる時は岩の裂け目に入れられ、その後で主の後ろを見るということだけでした。へブル人への手紙 12 章 14 節：「聖さがなければ、だれも主

を見ることができません。」 イエス様も山上の説教で「心のきよい者は幸いです。その人たちは神を見るからです」と言われました。神を見るためには、自らが聖い状態でなければなりません。罪ある存在が神を見たら、それは死を意味します。しかしやがての日には完全に聖められた者たちとして、私たちは神を見ると言われています。ヨハネの手紙第一 3 章 2 節：「愛する者たち、私たちは今すでに神の子どもです。やがてどのようになるのか、まだ明らかにされていません。しかし、私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています。キリストをありのままに見るからです。」 私たち自身がキリストに似た者となるという最終状態に至って初めて、ついに神を直接見るのです。それはどんなに素晴らしい日となることでしょう。私たちはこの世でも素晴らしいものを見て感動します。大自然を見て、その大きさ、雄大さに感動します。また偉大な芸術作品、絵画に接して、心奪われ、立ち尽くすような状態になることがあります。また大きな人格を持った人と接する時、その大きさに魅了され、たましいを全部吸い取られたような状態になります。ところが私たちはかの日にすべての良きものの源である神を直接見るのです。ウエストミンスター小教理問答問 4 の「神とは、どんなかたですか」との問いに対して、答えは「神は霊であられ、その存在、知恵、力、聖、義、善、真実において、無限、永遠、不変のかたです」となっています。私たちはやがて、その存在、知恵、力、聖、義、善、真実といったご性質において無限であり、永遠であり、不変である方に接するのです。その一つ一つのご性質において広大無辺で、極め尽くすことなどできないお方を仰ぎ見る時、どんなに深い驚きと感動と喜びが私たちの内に炸裂することでしょうか。それほどに私たちの存在と人格を深く満たすものは他に決してないでしょう。その方を直接に仰ぎ見、また交わる喜びに生かされるのです。また「彼らの額には神の御名が記されている」とあります。神の名が記されるとは、神が彼らをご自身のものと主張されるということです。それほどに彼らをご自身と深く結び付け、ご自身を分かち合い、守り、祝福してくださることを意味します。

そして最後の 5 節に「もはや夜がない」とあります。すでに 21 章 25 節でも見ました。ある人は夜がないならいつ眠るのか。新天新地では睡眠がなくなるのかと特に睡眠を楽しみにしている人は心配するかもしれません。しかしやがて私たちが頂く復活のからだは眠らないと健康を保てない弱い体ではないようです。疲れを覚えることなどない強い体をいただくのです。この夜がないとは、神の祝福だけが満ち溢れる世界であるということです。悪や神の民を苦しめる闇の要素は何もない。神の光はあまり

に豊かに注がれるため、もはやともしびの光も太陽の光もいらなくなると言われます。そして最後に「彼らは世々限りなく王として治める」とあります。これも創造の目的の回復と見ることができるかと思えます。創世記 1 章 26 節で神は人を神のかたちに創造し、ご自身を映し出す存在として、ご自身がこの世界を治めるようにこの世界を治める働きを与えました。人間は墮落して、神が治めるようではなく、自己中心的に世界を治める者となり、その結果、至るところに混乱と争いを引き起こしています。しかしやがての日には完全に聖められた者となり、今や神の御心を完全に理解し、神を映し出す者として、神とともに、神が治めるように新天新地を治めるという栄えある歩みをする者とされるのです。

今日の箇所から私たちが学ぶことは聖書が語る救いは単に罪のさばきからの救いだけではないということです。聖書の一番最後の黙示録は聖書の一番最初の創世記とつながっています。あそこで失ったものが、この最後において取り戻されています。あの創造当初の理想的な楽園での生活はもはや私たちの手の届かないものとなったかと思われましたが、ここに再びそれが現れています。しかもより豊かなものとして私たちに約束されています。神はご自身の計画が台無しにされたままにはしません。サタンの誘惑また人間の罪によって、頓挫させられることを許しません。神は創造当初にこの世界と私たちに対してご自身が持ってくださいました目標の地点へと私たちを確実に導いてくださるのです。やがて私たちが導き入れられるのは、神の創造のわざがもともと目指していたゴールとしての最終的御国です。その救いにあずかる方法は子羊キリストへの信仰です。いのちの水の川は神と子羊の御座から流れ出ています。子羊キリストによる私たちの身代わりのための十字架のみわざを通してのみ、私たちの罪は赦され、聖められ、神がご計画された本来の良い状態への回復が導かれて行きます。私たちは神がくださった子羊キリストにこそより頼み、この方を救い主と仰いで、神がご計画くださった素晴らしい最終ゴールに向かう歩みへと進みたいと思います。そしてそこで私たちに一人子さえも惜しまずに与えてくださった私たちの天の父にお会いし、神の御顔を直接仰ぎ見、神がご用意くださった素晴らしい御国で、神と子羊から永遠のいのちを豊かに受け、この神にお仕えする幸いに生かされる者へ導かれて行きたいと思います。